

川野楠己

人と業績

盲先覚者の偉業をたずねて

人と業績

盲先覚者の偉業をたずねて

推薦のことば

日本放送協会番組制作局長 香川 宏

昭和五十六年、国際連合は「国際障害者年」を設定し、障害者の社会への「完全参加と平等」をテーマにかかげた。更に昨五十八年から六十八年を「国連障害者の十年」として障害者の雇用機会の拡大などの運動を続けていくことになっている。国連の提唱した「完全参加と平等」は近頃よく使われるノーマライゼーション、すなわち、高齢者も若者も障害者も健常者も人間としてノーマルな生活を送るため、あらゆる社会で、ともに暮し、ともに生きるべきことを主張している。

ひるがえって、日本の明治百年の歴史を見た時、近代国家が成立し、経済・文化ともにめざましい発展をとげ、いまや世界でGNP一・二位を競うほどの経済大国にまで成長した。

しかし一方そうした繁栄の谷間で、社会的弱者とくに障害者は差別と偏見を受け、ときには迫害すらこうむった歴史もあった。障害者が人間としての尊厳をまもり、生きるための権利を主張し、自立の道を切り開くことなど困難な時代であった。

そうした中で、差別と偏見と闘い、いばらの道をかき分けながら、視覚障害者の福祉の向上に努力していた盲人先覚者がいた。

本書「人と業績」はNHK「盲人の時間」で、昭和五十五年四月から五十八年三月まで三年間にわたって、毎月一回放送してきた「人と業績シリーズ」三十三人の中から六人を選び、その人生を紹介するとともに、その偉業を称えるものである。

「人と業績シリーズ」は放送当初から反響も大きく、盲人先覚者の努力と真しな生き方は、盲学校生徒など若い視覚障害者にも深い感動と力強く生きてゆく勇気を与えてくれた番組であった。

放送の中味は三十分であったが、今回の出版に際して、番組制作者の川野楠己が調査・収集した資料をもとに、新たに関係者の証言などを加え、立体的な構成にした。

「葛原勾当」は幕末から明治に生きた筆曲の師匠である。点字という文字がなかったため、自分の脳裏に記憶する以外にその術がなかった当時、木活字を使って日記を書き綴った超人的努力家であった。

「森恒太郎」は青年政治家として将来を嘱望されていた時に失明、一粒の米に生きる悟りを得て、郷土・愛媛県余土村を、日本一の模範村に作り上げた盲目の村長の業績の記録である。

「平方龍男」ははり師として多くの患者を治療し、患者に生きる希望を与え、キリストの愛に生きた。

「中道益平」は中途失明した暗闇の中から立ち上り、重度重複障害者に光を与えるためにその人生を歩んだ。

「後藤寅市」は北海道に、視覚障害者のための文化の泉を築き上げた。

「金成甚五郎」は戦後の盲人運動のリーダーとして活躍、今日の盲人福祉の基盤作りに尽してきた。

「盲人の時間」は昭和三十九年四月に放送を開始し、今日では毎週日曜日の朝八時三十分と、再放送は金曜日の午後四時三十分からNHKラジオ第二放送で放送している。視覚障害者のために毎週三十分の番組を放送しているのは世界でもBBC（英国放送協会）とNHKだけである。昭和三十九年、日本の社会は急速に発展した。視覚情報時代、とくにテレビの黄金時代を迎えて、視覚障害者が放送の世界から取残されることがないようという配慮と、視覚障害者の共通の広場を提供したいという基本的考えにたって番組を新設した。放送内容は視覚障害者に必要な日常生活情報、はり・マッサージ師のための医学講座や経営相談など多種多様な情報を送り、視覚障害者の要求に応えてきたと自負している。中でも視覚障害者が職業的に自立する姿を紹介した「働く盲人たち」などが好評であった。

この本の著者・川野楠己はディレクターとして十八年、この番組を担当してきた。その間に数多くの視覚障害者の真剣に生きる姿に触れ、障害を克服して生きる視覚障害者の努力に感動し、その感動が本書を出版する原動力となっている。

本書が広く読まれることにより、一般の晴眼者に視覚障害者の真の姿が理解され、ここに登場する盲人先覚者たちが築いた福祉社会がさらに充実されることを切に願うものである。

序

光を与えた人々

日本社会事業大学教授 板山賢治

昭和三十九年四月、東京オリンピックを前にスタートしたNHKラヂオ放送の「盲人の時間」が今年で二十周年、「成人式」を迎えることになった。

昭和二十八年にはじまったテレビ放送が、三十年代に入って皇太子のご成婚から東京オリンピックにむけて爆発的な普及をみせるなかで、その谷間にとり残されようとしていた視覚障害者に対するラヂオの重要性が急速に見直され、盲人団体からの深い要望とNHK当局の積極的姿勢とがあいまって「盲人の時間」が誕生したのだといわれている。

この二十年間に放送された番組は、一、〇〇〇本をこえるといわれるが、これらの盲人向け放送が、わが国視覚障害者の生活・文化等の各分野に及ぼしてきた影響ははかり知れないものがあるようである。

本年二月二十二日、東京で開かれた「盲人の時間・二十周年感謝の集い」に二百人をこえる盲界関係者が集り、こども、今日までの労に感謝し、今後の発展を期待する挨拶を披露されていたことが、何よりも「盲人の時間」の役割の大きさを物語る証左であろう。

ところで、物事は「始めることは易く、続けることは難し」といい、「継続は、力」ともいわれる。「盲人の時間」という一瞬のうちに消える音の価値も二十年という継続がもたらしたものにちがいない。と同時に、この二十年の継続を支えてきたNHK関係者及び「盲人の時間」担当スタッフの労苦に心からの感謝と敬意を表さなくてはなるまい。

本書の著者、川野楠己さんは、昭和四十一年から今日までの十八年余にわたり、この「盲人の時間」を担当してこられた人である。

一、〇〇〇本余といわれる「盲人の時間」の番組のうち八五〇本以上を手がけられたとも伺っているが、まさに「育ての親」ともいえる存在である。わたくしが、川野さんにはじめてお目にかかったのは、昭和四十五年の春にひらかれた、全国の盲老人ホーム関係者の会議の席上であったように思う。昭和三十六年に奈良県・壺坂寺に初めて誕生した「盲老人ホーム」に深くかわっていたわたくしが、十年ぶりに老人福祉を担当する立場に帰った頃であった。全国盲老人福祉施設連絡協議会の本間事務局長から「NHKの川野さんは、陰になり日向になって盲老人のことを支援してくれているんです」という紹介を頂いて以来、おつきあいが始まったと記憶している。

昭和五十年、わたくしは、社会局の更生課長として身体障害者福祉を所管し、身障者実態調査の実施や国際障害者年の企画推進を担当するようになって川野さんとの接触は一層深くなっていく。そして、驚いたり感心させられたりしたのは、盲人問題に関する研究・研修の集り、盲人団体の行事、はては盲界の慶弔に関する集いには必ず川野さんの姿を見受けることであった。しかも、それが、仕事の取材や義理といった形式的な参加ではなく、盲界のそれぞれの人々との深く、暖い友情、人間関係に根ざすもののように思われてならなかった点である。

NHKの福祉番組担当者の中には、たしかに「仕事」の域を脱して盲人問題やろうあ者問題等にのめりこんで人間愛や使命感に燃えてボランティア活動に真剣にとり組んでいる人が何人かおられることも知ってはいるが、さしずめ川野さんは、その草分け的存在といえるかも知れない。

そんなことからおそらく、川野さんは、日本の「盲人問題」ないし「盲界事情」については、なまじな研究者等の及ばない学識とデーターをもっているにちがいないとかねがね想像をたくましくしていたところである。

本書を一読して、まさにわたくしの想像の正しさが実証されたように思う。

×

×

×

本書は、川野さんが、昭和五十五年四月から五十八年三月までの三年間に「人と業績」というテーマで「盲人の時間」に放送するために、取材・編集を手がけたわが国盲界の先覚者・三十三人のうちから特に印象に残った六人について伝記風に書き下ろされたものだという。

第一の登場者は、

「孤愁の盲楽人」といわれ、「木活字」を考案し、「日記」と「俳句」に江戸末期から明治初期に至る激動期の世相、風俗を記録し続けた琴の名手「葛原勾当」（一八二二年—一八八二年）

第二の人物は、

「盲目の村長」として郷土を全国一の優良模範村に作りかえるため、七項目の村是を設定して、率先その実現に一生をかけ、今もなお、小学校の副読本にその名を留める森恒太郎（一八六四年—一九三四年）

第三の登場者は、

「聖書を心の杖」として「新しいはり」の研究や世界初の「点学聖書」の出版につとめた社会福祉法人「信愛福祉協会」の創立者、平方龍男（一九八九—一九七六年）

第四の人物は、

「小さな体の大きな指導者」といわれ、日本盲人会連合（日盲連）の第三代会長として、日盲連の東京進出、その法人化、日盲連センターの建設等を実現し、福祉年金の創設等盲人福祉運動の方向づけに偉大な実力を発揮した金成甚五郎（一九〇八—一九七四年）

第五の人物は、

「盲人運動のバイオニア」と呼ばれ、北海道・十勝の地に愛盲運動の灯をかがげ、北海点字図書館やテープ雑誌の創設、盲人ガイドヘルパーや盲人ホームの実現に命をかけた後藤寅一（一九〇二年—一九七一年）

第六の登場者は、

「愛なき人生は暗黒であり、汗なき社会は墮落である」と説き、盲精薄や重複障害者のために越前福井の地にわが国最初の「重度重複障害者授産施設」光道園を創設した中道益平（一九〇七年—一九七八年）

春にはおそい雪の降る夜、盲人福祉研究会の田中徹二さんからお借りした川野さんの原稿を読みはじめたわたくしが、ふと気がついた時は、しじらと夜の明けそめる頃であった。ここに書きとめた六人の先覚者のメモは、その時のものである。

まさにひき入れられるように……というのはあの時のことであろうか。それは、六人の方々の人生のすさまじさが読む者の心をとらえて放さないのか、それとも川野さんの心のこもった見事なまでの筆の運びがなせる業なのか。いや、その二つが因となり果となって、不精者のわたくしをして一気呵成に読み切らせたにちがいない。

×

×

×

川野さんは、「盲人の時間を担当しての感想ないし盲人観は」という問いに「盲人の先覚者の生き方には、ただ頭が下る思いです。」「盲人の生き方を知るにつけて、盲人は『光を失った人々』ではなく、むしろ晴眼者に対して『光を与えてくれる人々』だと思っています。」と答えている。

また、「盲人の時間」の制作にとり組む態度について「ニュース性とか華やかさとかに走らず、盲人の暮らし、生活に根ざした厚味のあるものを目指しています」と語っておられる。

本書は、まさに、こうした川野さんの「愛盲の心」と「記者魂」に支えられた見事な筆致で描き出した盲界先覚者の「生きざま史」である。本書は全国四十万人を数える視覚障害者とはもとより、共に生きる晴眼者の人生に対して「光」を与えてくれているように思われてならない。

「完全参加と平等」の実現を目指してスタートした「国際障害者年以後の十年」は、今年で三年目を数えようとしている。障害者の「参加と平等」実現のためにのりこえなければならぬ「物理的・制度的・意識的」な障壁は、高くて厚い。

しかし、本書で川野さんが描き出してくれた六人の先覚者の生涯は、これからの斗いの前途に「光」を掲げてくれているようである。

本書は、視覚障害者問題にかかわる人々はもちろん人生について深く考えようとする人々に知恵と力を与えてくれるにちがいない。

特に、障害児教育に関わる方々には是非とも一読をお奨めしたい。

（前厚生省社会局更生課長）



スタジオで録音中の著者

「盲人の時間」放送テープの編集作業



社会教育部内のデスクで



本書執筆のための取材旅行



目次

葛原 勾当	1
——「ひらがな日記」と箏曲と——	
森 恒 太 郎	35
——一粒の米に救われて——	
平方 龍 男	63
——祈りと愛とはりと——	
金成 甚 五 郎	91
——愛盲精神に生きて——	
後 藤 寅 市	113
——第二の失明を乗り越えて——	
中道 益 平	145
——光の道を切り拓く——	
「人と業績」放送記録	169
あと が き	170

装丁 題字

伊 增

藤 田

宣 芝

真 暎

葛^{くす}
原^{はら}
勾^{こう}
当^{とう}

— 「ひらがな日記」と箏曲と —

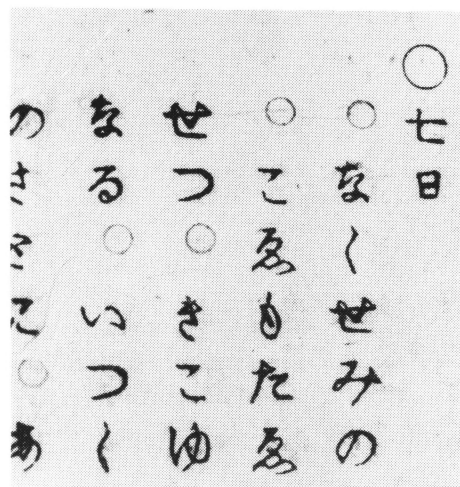
一、	遺徳顕彰会	5
二、	神辺町	6
三、	出生	7
四、	京都で学ぶ	7
五、	日記をつける	9
六、	木活字で書く	10
七、	日記に記された出来事	14
八、	家を設計する	18
九、	歌人、葛原勾当	20
十、	幕末から明治へ	21
十一、	孤愁の盲楽人	23
	本文注	28



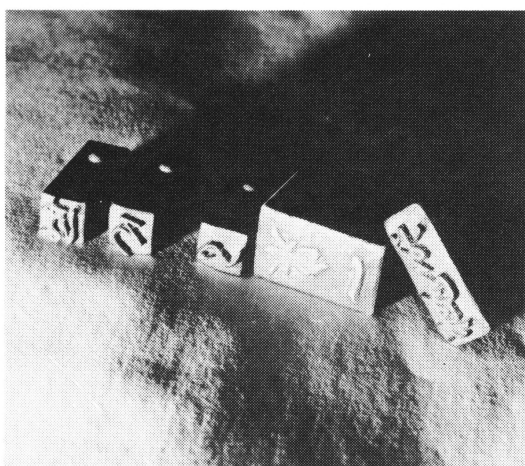
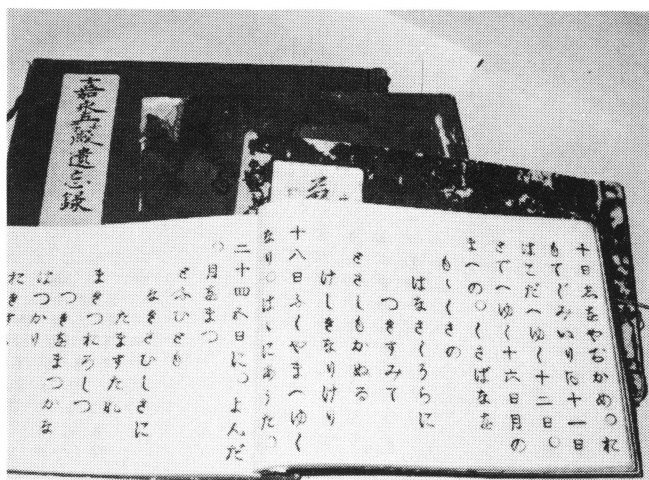
葛原勾当の肖像画



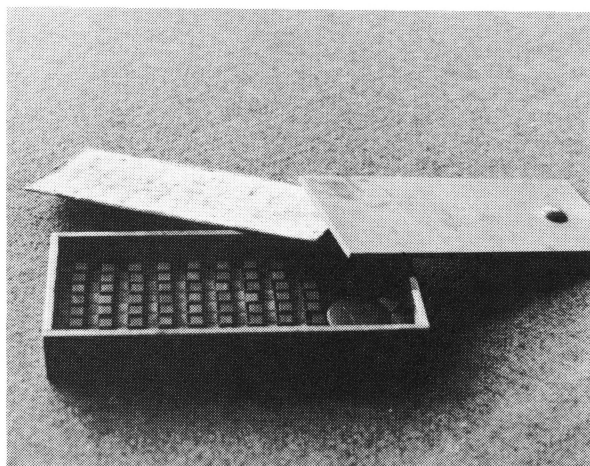
葛原勾当自身の設計による旧宅



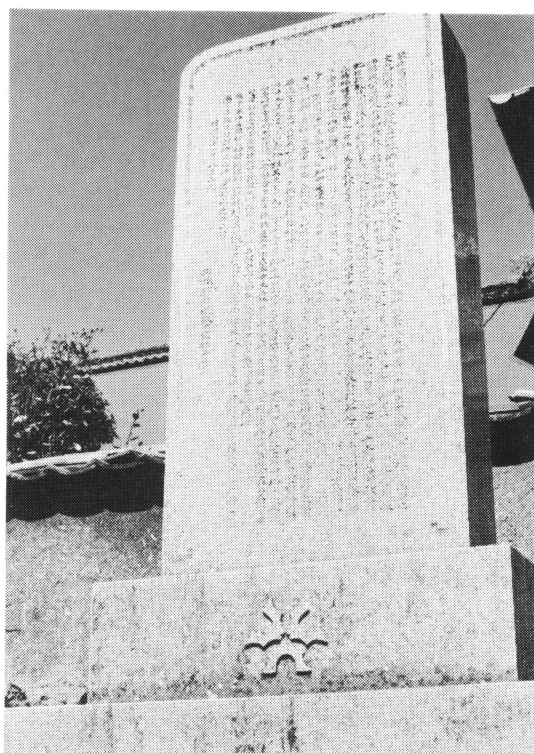
ひらがな日記



木活字



葛原勾当碑



(写真・著者撮影)

一、遺徳顕彰会

近くの梢ではとぎすが、けたたましく鳴いた。そろそろ穗が出始めた青田を波打つように風が渡る。と、その風が琴の音を運んで来た。広々とした田面に箏曲が流れている。

昭和五十五年九月七日午後二時、広島県深安郡神辺町の小学校体育館で、「葛原勾当没後百年記念箏曲演奏会」が開かれていた。平素はボールを追う児童たちの歓声が響くこの場所に、紅白の幔幕が張られ、舞台が作られている。演奏される曲は『花形見』『孤の嫁入』など、この地が生んだ盲目の勾当。葛原一^{いさ}泉の作曲によるものばかりである。

広島市の生田流箏曲福寿会の家元、楠田典史^{のりふみ}氏を始め、地元の箏曲愛好家たちによって華やかな舞台がくりひろげられている。

「勾当さん」の作品が久しぶりに聞けるとあって、会場は地元の人たちを始め、東京から駆けつけた人々も加わって熱気がこもっていた。舞台には、葛原勾当一泉が、かつて竹の一絃琴を考案し演奏したことになんて、珍しい一絃琴の演奏が、奈良県飛鳥寺住職山本雨宝氏によって行われ、テレビのニュースカメラのライトを浴びるなど、大変な盛り上がりを見せていた。

この日の催しは、葛原勾当の没後百年を記念して、その年の四月から行われてきていた各種の行事の中で、その最後を飾るのにふさわしい華やかなものだった。

この葛原勾当遺徳顕彰行事は、葛原勾当の菩提寺である神辺町の蓮乗院住職、筒井清道^{きよみち}氏や竹尋公民館藤井泰造^{やすぞう}氏、そして神辺ライオンズクラブなどの協力で進められたもので、特に神辺町歴史民俗資料館で開かれた、葛原勾当が愛用した数々の遺品の展示会にも大勢の人々

が集まった。

展示された遺品の中には、長さ一メートル三十六センチ、朱塗りの格式高い勾当の位を示す「勾当杖」を始め、邦楽史の中でも有名な京都の松野検校に学んだ時に頂戴した昇進の免許状、葛原勾当愛用の「長磯」と銘の入った琴、入門者が差し出した誓詞、茶道具、喫煙具などから入函にいたるまで、保存されていた数々の遺品が展示された。

その中で、観客が必ず立ち止まって熱心に中を見つめていくコーナーがあった。そこには、桐の小箱に収められた五、六十本の印鑑のような印字用具と、それを使って、葛原勾当自身が、天保八年（一八三七）から明治十四年（一八八一）までの四十四年間、盲目の身でありながら書き綴っていた日記帳が展示してあった。

この日記は、まだ盲人が、「点字」という文字を持っていなかった時代に、「いろは」と「数字」などの六十三文字の木製活字を用いて、一文字ずつ捺印する形で記入していたものである。内容は稽古の曲名の記録を中心に、四十四年間の行動や感想、そして和歌などが、書き綴っている。

この日記は今日でも、葛原勾当の行動を手取るように推測することができると同時に、当時の箏曲家の出稽古の有様や、箏曲の普及状態、地震などの気象の記録など当時を知ることができる貴重な資料であり、その学術的な評価も高い。広島県は、この日記と印字用具を広島県重要文化財に認定している。

この日記は後の大正四年、童謡詩人として有名な葛原^{はら}氏の手によって、活字本として出版されたが、今日ではまったく入手できないものとなってしまう。この顕彰行事の一環として昭和五十五年八月、元広島大学教授小倉豊文^{とよふみ}氏の手によって改訂版が出版されたのはうれしいことである。

本文ではこの葛原^{はら}編の「葛原勾当日記」と「葛原勾当日記」小倉豊

文校訂（緑地社発行）を、随時引用させていただきながら筆を進める。

二、神 辺 町

東京から西へ四時間四十分、山陽新幹線が福山駅に着くと、ホームのすぐ先に小さな城が見える。それは姫路の白鷺城の派手な美しさとはまったく対照的な、地味な雰囲気を持ちながらも、小ぢんまりとまとまった福山城である。

この城は、備後十萬石の領主として、水野勝成が元和八年（一六二二）に神辺から芦田川河口の常興寺山にうつして築城させたものである。

豊臣秀吉から徳川家康に天下が移ると、家康は、大名統制を行って全国の大名をその支配下に置いた。そのおりで大和郡山の水野勝成は、この備後の神辺城主として配置換えされたのである。神辺城（福山）に來た水野は、秀吉が好んでいた伏見城からやぐらを移して築城したといわれ、今日ではその三層の伏見やぐらと筋鉄御門は重要文化財として、当時のまま残っている。また戦災で焼失した城閣は、昭和四十一年復元され、桜の美しい公園となっている。天守閣に登ると南には瀬戸内海の波が光り、北には緑豊かな平野が広がり、やがて、なだらかな登りとなって、吉備高原から、中国山脈へと連なっている様子がわかる。

福山駅から北に二十キロ、その平野が高原へ向かって自然に登り始めようとしたあたりに、広島県深安郡神辺町がある。このあたりは、田園の中を、白い帯のように国道が走り、その部分だけに動きが感じられる以外に、まったく静かな田園地帯である。

その神辺町八尋に、葛原勾当が住んでいた家が今も残っている。小

高い丘にそって走る一本のせまい道を行くと、ぱっと左手が開け、いくつかの自然石の碑が立った大きな家の前に出る。ここが葛原勾当自身が弘化二年（一八四五）に自ら設計し新築し、明治十五年（一八八二）に没するまで住んでいた家である。

家の背後には、竹林が続く小高い丘があり、家の前には、広い車溜まりの敷地がある。そこから十四、五段の石段を登った高い所に、瓦の載った山門があり、左右に立派な築地塀がめぐらされている。山門の奥に大きな屋根を持ち、格式のある玄関を構えた家がある。また、広い車溜まりに面した築地塀の下に、琴柱を三つデザイン化した家紋をあしらった、高さ一メートル八十センチもある大きな石碑が立っている。

その碑文は、葛原勾当没後六年目の明治二十一年八月、興讓館教授、坂田丈によって書かれたもので、葛原勾当の伝記として書かれた最初の文献である。——ただしこの石碑は背面の刻文によると、昭和五年になってから遺族や門人たちの手で建立された——碑文は、全文六百十字の漢文で、「琴師葛原勾当碑」として、彼の生涯とその偉業をたたえている。小倉豊文氏の「葛原勾当日記」に紹介されている訓読みの一部を引用すると、

師ハ幼ニシテ明ヲ失フト雖モ、而モ奇巧有り。謂フ所ノ八雲琴ハ多ク師ノ考按ニ出ヅ。而モ中山氏専ラ其ノ名有ルモ、師敢テ争ハザル也。又、活字版ヲ造リ、居常之ヲ摸排シ、以テ日誌ヲ作ル。泰西人、教育ニ凸字ヲ用フルノ意ト暗合ス。

性、謙讓、技ヲ以テ人ニ矜ラズ。深ク仏ヲ信ジ、毎朝經文ヲ念唱ス。又、好ミテ和歌ヲ賦ス。著ス所ノ新曲数十曲有り。世多ク之ヲ伝フ。

この碑文が刻まれた石碑の反対側、すなわち山門をはさんで左側にも石碑が立っている。これも、高さ八十センチほどの自然石の台座の上に、一メートル八十センチぐらいの大きな石碑が立っているもので、これには——ぎんぎん、ぎらぎら夕日が沈む、ぎんぎん、ぎらぎら日があること、この詩の作家、葛原^{あき}こそ、葛原勾当の直系の孫にあたり、大正から、昭和にかけて、北原白秋などとともに童謡運動の第一人者として活躍した人である。^{あき}は、特に第二次大戦の末期のころ、東京からこの家に疎開され、この神辺町付近の私立女子高等学校長などをしていたから余計に、この土地の人々は葛原勾当を身近なものと感じている。

この葛原^{あき}によって大正四年に出版された「葛原勾当日記」は、葛原勾当の存在を初めて世に知らしめる大きな役割をはたした。それによって、生涯日記を書き続けた勾当の努力に、人々は絶賛の拍手を送ったのである。

三、出 生

葛原勾当はこの神辺町、当時の備後国安那郡八尋村で、庄屋矢田重知の長男として、文化九年（一八一二）三月十五日に誕生。幼名を柳三、いみなを重美^{おもみ}といった。そのころの彼の生家は、葛原屋敷と言われ、村の土地の半分を持つという代々続いた庄屋であった。葛原というのは屋号である。そんな家で、しかも長男として大事に育てられてきたのであろうに、三歳になった時、村に流行した天然痘のため失明してしまった。母親は、備中国後月郡井原村^{いばら}の庄屋田中紋左衛門の長

女で、ヒデといった。母親は、嘆き悲しみの時を経た後のある時、琴を弾いていると、その脇にいた少年柳三は母親の弾く琴に興味を持ち、じっと聞いている。やがて自分で絃に指を触れたり、はじいて音を出しては喜ぶようになった。子守り婆やが琴柱を立てると調子が合わず、柳三は不機嫌になり、むずかる我が子の姿をみて、母親が調子を合わせてやるとすぐに機嫌を直して、その琴の前に座って絃をはじいて遊んでいたという。

そんなことから、九歳になった時、備中国大江村（現岡山県井原市）にいた「おキク」という盲目の師匠を招いて住み込ませ、名前も「琴の一」と名付けて、本格的に少年柳三に琴の手ほどきをした。

琴の一はすぐに曲を覚えた。指の運びはまだ幼いものだったが、一度耳にした曲は正確に演奏してみせて、母や師匠を驚かすことがたびたびだった。こうして一年ばかりたった時、師匠のおキクは、

「もうこれ以上私に教えるものはありません。琴の一は、優れた技量を持っているのですから、これからは京都に出て、正式に修業すれば、将来素晴らしい検校になることでしょう」

といって、葛原屋敷を去っていった。

四、京都で学ぶ

母親のヒデは、十一歳になった琴の一をつれて、平素、京に出入りしていた呉服屋の伊勢屋に道案内をさせながら、京都に上った。旅は福山近くから、海路で明石に出て、そこから、陸路京都に入るという道順である。井伏鱒二は、その随筆の中で「頭を青く剃った、十一歳の琴の一」と書いているが、事実残された彼の肖像画には、頭を完全に僧侶のごとく剃られた晩年の姿が描かれている。したがって、もつこの十

一歳のころから、箏曲家としての風格を持っていたのかもしれない。

京都に着くと、八重崎檢校の直門である松野檢校の家に内弟子として入り、母親と一緒に住み込んで四年間修業を重ねた。その間、生田流の琴を、松野檢校と八重崎檢校に学び、三弦は松浦檢校と菊岡檢校から、柳川流地唄三味線を修得した。

ここで、中塩幸祐著「先師の足跡」から、琴の一角が学んだ師匠たちの横顔を調べてみよう。

○八重崎檢校（？）（一八四八）

琴の演奏、作曲では史上まれに見る達人で、特に地唄三味線の名曲を琴に移調する編曲家としては秀れた技を持ち、数十曲を編曲している。その作品は今日でも数多く演奏されているが、中でも「越後獅子」、「四季の眺」、「御山獅子」、「夕顔」、「若葉」などがある。まさに京物風合奏法を生み出した父と言える。

○松浦檢校（？）（一八二二）

柳川流地唄三味線の名手、超人的な力をみせ達人の名をほしいままにした人。多くの名曲を残している。「四季の眺」、「宇治巡り」などの四曲物を始め、「新浮舟」などがある。この松浦檢校が、八重崎、菊岡両檢校と力を合わせ、京都物地唄を完成。その黄金時代を築き上げた。

○菊岡檢校（一七九三）（一八四七）

柳川流地唄三味線の達人、八重崎檢校とともに京都物地唄の黄金時代を作った人。その作品には秀作・名曲が多く、「磯千鳥」、「今小町」、「御山獅子」など、今日でもたびたび演奏される曲を残した。

○松野檢校（？）（一八四一）

「ままの川」の作曲家として今日名が残っている。琴の名手であった。京都の人。

以上のように、まさに、琴の一角が京都に出向いたころは、京物の地唄の黄金時代がこれらの盲目の楽人たちによって花を開かんとしていた時代である。地唄と生田流箏曲は、京都以西でその時代の最先端をいく華やかな芸事であったのであろう。その時に遠く備後国にいら、琴の一角の母親は、この四人の花形師匠たちを結ぶことのできる要にいた松野檢校を選び、内弟子に入門させた慧眼には驚く他はない。こうして四年間に、琴の一角はこれら師匠が新たに作曲した四十数曲を始め、数多くの古典箏曲を学んでいるが、後の日記を見ると、その中から十数曲を弟子たちに教えている。

また、この京都での修学の四年間に、母親ヒデはたった一度、備後の八尋に帰っただけである。これも井伏鱒二の推測によると、当時もう勾当になっていた琴の一角に檢校の位を取らせるため、父親に三十両の金について相談するためでなかったか書いている。また、琴の一角は勾当にはなったが、さらに三十両という大金を積んで、檢校の名前を得ても、琴の音色が変わるわけではないから、今の勾当の位で充分であると言いつつとも伝えられている。

事実、当時の職屋敷の階級制度は、技量がそれに伴わなくても、階級に合った金額を納めれば、その階位を獲得することができたようである。

葛原家に残る遺品によると、琴の一角は文政八年（一八二五）の八月八日、十四歳にして「琴の一角、座頭才敷衆分」という階位を得ている。そして翌年の文政九年に京都を離れて、八尋の親元に帰り、晴れて、箏曲教授として開軒するのである。当時の芸事の中心地、京都で四年間の修業をし、最もモダンな芸を持って帰った若い琴の一角のもとに、稽古を求めて土地の豪農の娘さんや、町の商家のご内儀や娘さんたちが殺到して来たのも無理からぬ話であらう。その年の十一月、備後国

深津郡千田村（現在の福山市）の河相陸女が、「筑紫琴神覽録」の誓詞に署名捺印しているのが、今日記録に残る弟子入門の最初である。当時の入門者は前記の「神覽録」に署名捺印するか、個人ごとに誓詞を出していた。今も遺品の中に、それらが多く残っている。

このころの稽古は、それぞれの門人たちの家に琴の一が出向いていて、数日間滞在して稽古をつけるという方法がとられていたようである。

五、日記をつける

ここに一つの証言を紹介しよう。葛原勾当遺徳顕彰会の会長をつとめる葛原家の菩提寺である蓮乗院住職筒井清道氏と、竹尋公民館長藤井泰造氏の話である。

『京都という都の最も新しいお琴を、中国地方の田舎に伝えたいということ、十五歳で勾当さんは帰国されたわけですが、それからというもの、いつも、数多くのお弟子さんに囲まれての忙しい生活が続くわけです。そのころはほとんどが稽古ですから、行動範囲は大変広い区域にまたがったわけですね。』

まあ昔でいいますと、備前、備中、備後という三備地方ですね、岡山県の西部から広島県の東部にまで及んでいます。そこへ、それぞれ出掛けて行くわけですからね、それは、大変だったと思います。多い時なんか一年のうち三分の二まで、他に出ているんですね。まあちょっと考えると、家庭はどうなっていたんだろうかと疑問に思うこともありますけれど……。

まあそんなことで、教える師匠として、当然必要なのは、何日、

誰に、何という曲を教えたか、という記録ですね。そのメモがないと、次に行った時に、相手の技量を読み取り、先に進んだりすることができないわけです。師匠として稽古先に行ってから、いちいちこの前はどこまで、何をやりましたかね、なんて聞くのは、第一権威がありませんからね。そこで稽古先の家に入る前に、そっと記録を付き人に読ませておいて、その家に入った時に、さあ、あの時、「何々の曲を教えたけど一度弾いてもらいなさい」なんと言つと、まあ、私のことをそんなに覚えていてくれたのかしら、というような気持を持ちたりして、一層、師弟の信頼関係ができ上るのに役立つわけですね』

というようなことだったのであろう。最初は半紙を横長に二つ折りにして、右端をこよりでとじた縦八センチ、横十七、八センチぐらいの帳面を作り、それに、年月日と、門人の名前、稽古をつけた曲を代筆させている。

この代筆による記録は、文政十年（一八二七）十六歳の正月四日から始まり、天保七年十二月二十九日までの十三年間続けられており、帳面は八冊に及んでいる。

文政十一年正月と、二月を見てみよう。

文政十一年正月吉日

一、五日。大前。あふきのこひ。七くさ。やしま

同十日。一、岡手屋。

十一日。一、八尋^色。

十二日。一、尾道。一、こすのと。一、鶴のこえ^色。

一、すみえの月。一、さかの春。✓

一、すみえの月。✓

一、なにはしゝ。一、松つくし。↗

一、すみえの月。一、滝つくし。↗

一、天下太平。一、六たん。一、雪のあした。↗

一、八たん。一、すみえの月。一、同。↗

二月七日。一、尾道屋。松永。

九日。一、神辺。

十一日。一、吉永。一、くろかみ。一、あやきぬ。↗

十五日。一、万能倉。

十八日。一、信岡。一、あさとで。一、あふきのこい。一、ねの

ひ。↗

廿六日。一、河相。一、尾嶋。一、八千代しゝ。

この二月二十六日には、最初の門人として誓詞を入れた河相の名が出てきている。八千代獅子を教えたことが記録されている。

この日記帳には、手引きの人や、門人たちの家の人等、不特定多数の人たちがそれぞれ墨書きしたのであろう。稚拙な文字や、上手にきちんと書かれてる文字、中には、いかにも良家の娘さんかご新造さんと思わせるような水茎の跡うるわしい文字など、さまざまな筆跡が残されている。

やがて京都から帰国して五年たった。天保二年（一八三一）二十歳になった琴の一は、二月六日八尋村を出発して京都に向かった。その日の代筆日記によると、

天保二年二月六日、竹原屋忠七舟、京都参

とある。そして十三日西宮に上り、十五日京都に着いている。そして、七月二十日に京都を発つまでの五か月間、師匠の家で新しい曲を

学び、京都の師匠や友人たちの間を挨拶回りなどしながら、都の新しい知識や情報を身につけてきている。そして八月八日、八尋の自宅に戻っているが、その間四月一日、葛原勾当は座頭美濃のいちとして葛原の苗字を許され、階級も座頭の最高位を得ている。そのためには当時の職階別によるとおそらく百二十両という大金を職屋敷に納入したのであるうと小倉豊文氏は推測している。

そしてさらに、天保四年（一八三三）二十二歳の九月に再び京都に向向いている。すなわち九月十三日、尾道より舟で京都に向かい、二十日に京都に着き、十月七日に京都を発って、十八日には尾道に帰っている。その旅行の最大の目的は勾当の階位を受けるためであったよううで、十月一日から、葛原勾当美濃の一としての公称を許されている。ここで晴れて、葛原勾当となったわけである。厚い美濃紙に包まれた昇進の免状は今も残っている。

この旅行で、木活字を入手したのかあるいは、その木活字のあることを話に聞いてきたのか、四年後の正月から、木活字を使って自分で記録をつけるようになっていく。おそらくこのころから木活字の情報をつかんで、それを胸中で温めながら、盲人がそれを使用するための使用法や一字一字の識別の仕方など工夫を始めたのではないだろうか。

六、木活字で書く

天保八年正月一日から葛原勾当は、木活字を使って、自分の手で、日記を書き始めている。用紙は半紙を二つ折りにして綴じた横長の帳簿で、縦八・七センチ、横は十八・一センチ以上あったと思われる——現在残っているものは、綴じ目が切り取られているので正確な寸法はわかっていない。

その第一ページは、次のようになっている。

○正月一日

同よめる

たちかゑる

○としのは

しめは○な

んとなく○

志すがここ

ろも○あら

たまりぬる

○やまうは○

ことにて○

八へん

とみごとに書き綴っている。おそらく京都で買ってきた木活字を使って、いろいろ書き方を研究し、実際に捺印して弟子たちに読ませるなどのテストをくりかえしてから、この日記帳に書き始めたのである。葛原勾当が、喜々として書いているさまが目には浮ぶようである。

さらにその続きの二日、三日と読み進めてみよう。なお、原文は、大正四年十一月二十五日、東京日本橋博文館から発行された葛原幽編の「葛原勾等日記」から引用する。文中の脇の漢字は、葛原幽が本書発行の際に、読者の理解を得るためにつけたものである。

○正月一日 同よめる。

たちかゑる。としのはしめは。なにとなく

志すがこころも。あらたまりぬる

「山婆」琴
やまうは。ことにて。八へん

○同二日 同よめる。ことにて。十二へん。

おふへむら。ちよみ。八つとききたる。あすましし。さみ

せんとおわせたることそのかすをしらぶ。

おもうち。しらへてあそぶ。いとたけの

かづにひかれて。けふもくらしつ

「越後獅子」。同五へん。

○同三日 さとのあかつき同二十へん。あわする。

○同四日 ちよみ。たつの。こくに。かへりぬ。

同みのこくに。おふへむら。あさぶろう。きたる。八つに

かへりぬ。

○同五日 いたらう。ちよみ。八つにきたつて。ほどなくかゑり

ぬ。

○同六日 ちよみ。きたる。すべては間違ひたる

○同七日 しきのながめ。二十四へん。あわす。

○同八日 ちよみ。きたる。あつたつて。ほどなくかゑりぬ。

○同九日 ちよみ。きたる。あつたつて。ほどなくかゑりぬ。

○同十日 ちよみ。きたる。あつたつて。ほどなくかゑりぬ。

○同十一日 ちよみ。きたる。あつたつて。ほどなくかゑりぬ。

○同十二日 ちよみ。きたる。あつたつて。ほどなくかゑりぬ。

○同十三日 ちよみ。きたる。あつたつて。ほどなくかゑりぬ。

○同十四日 ちよみ。きたる。あつたつて。ほどなくかゑりぬ。

○同十五日 ちよみ。きたる。あつたつて。ほどなくかゑりぬ。

○同十六日 ちよみ。きたる。あつたつて。ほどなくかゑりぬ。

○同十七日 ちよみ。きたる。あつたつて。ほどなくかゑりぬ。

○同十八日 ちよみ。きたる。あつたつて。ほどなくかゑりぬ。

○同十九日 ちよみ。きたる。あつたつて。ほどなくかゑりぬ。

○同二十日 ちよみ。きたる。あつたつて。ほどなくかゑりぬ。

○同二十一日 ちよみ。きたる。あつたつて。ほどなくかゑりぬ。

○同二十二日 ちよみ。きたる。あつたつて。ほどなくかゑりぬ。

○同二十三日 ちよみ。きたる。あつたつて。ほどなくかゑりぬ。

おてう。三味線「鉄輪」は始。
さみせんで。かなわを。はじめ。

(注①)

これを読んで、正月元旦から実に数多くの稽古を重ねている真剣さに驚かされる。と同時に、勾当自身がこのように記録していくということは、木活字を使用して、一字一字捺印していくのであるから、それはそれは大変な根気と時間がかかったことであろう。しかも、これは全旨の葛原勾当にとってみれば、いくら一字一字捺印していても自分ではまったく読むことができないわけである。日記を書いていながら、本当に文字が続いた文章になっているかどうか不安になったに違いない。さらに三歳の時に失明しているから、文字を見た記憶もないし、文字の概念をまったく知らないはずである。おそらく後天的に得た知識から文字のあることを知ったのであろう。けれども、それらのことは、まったく意に介せず、むしろ楽しみながら書いていったのではないかとも思うような文章も出てくる。書き始めて六か月たった天保八年の六月十六日の日記をみてみよう。

○同十六日 きうそく。やれたいくつや。あつや。へいこうへい
こう。閉口閉

○同十七日 あるうたに
朝寝 屋寝 晩寝
あさねしが。またひるねして。はんねして。

たまにおきて、いねむりをす
昨日 寝程 寝程
とやら。きのをから。ねるほどにねるほどに。ゆめばかりみ
るわい。
申出 戌刻 八尋 戻
さるのこくにいでて。いぬのこくにやいろへもどる。

○同十八日 何なにをしたやわがわからぬ。
何なにをすることがない。
○同十九日 何なんにもすることがない。

あつやあつや 暑暑
○同二十日 またきうそく、このごろは。きうそくだらけでござ
る 又休息 此頃 休息 御座

○同二十一日 卯下刻出 高屋川本 来
うのげこくにいでて。たかやかわもとにきたる。

おてる。三味線「葵」
さみせんにて。あをいのうゑをはじめ

○同二十二日 せみのこえかやかましい。
長崎目付 通居

○同二十三日 ながさきめつけのおとをり。したにをれ

(注②)

などと書き残しているが、楽しんでこの日記をつけていながらも、暑さで弱り、退屈で困り、何事にも手がつかず、蟬の声すらやかましく感じている葛原勾当の姿が浮かんでくる。

しかし、勾当は、その前年に井原村庄屋田中家から十七歳のアサを花嫁として迎えたばかりである。それなのになぜ、こんなに退屈し、いらいらしていたのであろうか不思議でもある。

さて、では一体どんな方法で盲目の葛原勾当がこの木活字を使って日記を書いたのだろうか……？ 現在葛原家の菩提寺蓮乗院に保存されている実物をみてみよう。

この道具一式は、コンパクトにまとめられて桐の箱に収められている。これを出張稽古や、京都などへの旅先に持ち歩き、常に夜となく昼となく、暇をみては書き続けていたようである。昭和十二年、初めて来日したヘレン・ケラー女史がこの活字を知って、「これはまさにタイプライターではありませんか。日本のタイプライターは盲人が発明したのですね」と驚嘆されているように、葛原勾当自身の細かい計算の上になりたったアイディアの結晶として、この印字用具が取り揃えられたということができよう。

まず箱から見てもみよう。

長さ二十六センチ、幅十一センチ、深さ四・一センチの桐の箱である。ふたは箸箱のふたのように、彫りこまれた溝にそって横に滑らす差し込み式になっており、同じ桐の板が使われている。一度閉めたら開かないように簡単なバネがついていて、パチンとロックされるようになっていいる。

ふたを取り除くと、薄い桐板の中ぶたがあり、白い紙が両面に張っている。これは日記を記入する場合の下敷きとして使われたものである。さらに、活字の位置を定めるために後述する枠定規を使う時に、この枠を固定するためにピンを用いるが、そのピンを刺すためにもこの下敷きが必要なのである。事実、この中ぶたの桐板には無数のピンの小孔が残っている。

その中ぶたを取り除くと、その下に活字が次のように並んでいる。

いろはにほへと
ちりぬるをわか
よたれそつねな
らむゐのおく
やまけふこえて
あさきゆめみし
ゑひもせすん志
一二三四五正月
六七八九十日同

この配列に大変意味がある。

一行七文字ずつ縦に並び、横に九行あり、全部で六十三文字ある。右から七行までは、いろはにほへと、ちりぬるをわか、とひらがな順に四十七文字続いており、「ん」と変体仮名「志」が加わって、四十九

文字となっている。

残り左の八行目は、数字で一から五までと「正」「月」の七文字。最後の九行目は六から十までの数字と「日」「同」の二文字を加えた七文字で、計六十三の木活字が正しく配列されている。

この活字は堅い木でできており、およそ一センチ角で長さ三センチぐらい、四角い棒状で角印鑑のような感じである。この一本の木活字には、指先で触った時に識別できるように特別な工夫がしてある。すなわち、一行目の活字には、全部、右側面に横に一本細い溝が彫っている。二行目の活字はやはり右側面に二本の溝がある。三行目は三本と、それぞれの行に合った数だけ溝が刻まれている。次に左側面には上から順に、一、二、三と七までその位置に合った溝が同じように彫っている。したがって「い」の活字は、右側に一本、左側に一本とそれぞれ溝が刻まれている。「か」の字は二行目の七番目にあるから、右に二本と左に七本の溝があるといったように、右と左の活字に彫られた溝の数の組合わせで、目的の活字を探することができるようにしている。

次にどんな方法で、葛原勾当はこの木活字を使って日記を書いたのか。その使用法だが、これもまた独特の工夫がしてある。この活字を収めた箱の中に、長さ、二十四・六センチ、幅一・二センチの小さな梯子のような十九のマスのある枠定規が二本入っている。この枠定規を用いて、真っ直ぐに捺印していくのである。まず、日記帳のページの下に、中ぶたになっている下敷きを入れ、紙の上にこの梯子のような定規を置く。次にその定規を固定するために、木活字と同じ大きさでピンが出ているものが、このセットの中に用意されている。この押ピンを上下のマスに差し込むと、これで紙と定規が固定できる。続いて、その定規のマスに、一字一木活字を選んで捺印していくわけだが、同じ所に二度文字を重ねたり、一字飛ばしたりしないように、活字と同じ大きさの丸い棒

が用意されている。この留棒と呼ばれる丸い棒を、文字を捺印するマスの一つ下に置く。必要な文字の活字を選んで、その留棒の上のマスに捺印する。

留棒を一つ下にずらしてから捺印した活字を取り除き、次の活字の用意をして、留棒の上のマスに捺印する……といった方法で、常に留棒の上のマスに文字を捺印するということによって、二重に捺印したり、一字飛ばしたりすることがないように考えられている。また、行かえの場合は、今書いてきた定規をはずす前に、次の定規を固定すれば良いわけで、そのために定規は二本用意されていたと考えられる。さらに文章の終りには細い竹を切ったもので、句読点として「丸」をちゃんとつけているのにも驚かされる。

また、箱の中には、印肉壺や「葛原」「一泉」などの署名用の木活字も収められている。

これらの木活字について、小倉豊文氏は次のように提言している。

『右側と左側の溝の数で一つ一つの文字を識別するというアイディアは、盲人用の点字の考え方に、相通ずるものがあるのではないでしょうかね。その意味から言いますと、フランスで、ルイ・ブラユが点字を完成させたのが一八二三年で、この葛原勾当が自分で日記をつけ始めたのが天保八年（一八三七）ですが、葛原勾当自身は、随分前から考えていたようですから、ほぼ同じころに東西の盲人が、文字を書くということを考えていたわけになり、大変興味のある話だと思います。ただ、点字の場合は、盲人自身で書いて盲人が読めるわけですが、この葛原勾当の印字法ですと、自分で読めないわけですから、それを考えると、自分は読めない日記をなぜこんなに苦勞して書き続けたか、ということが大きな疑問として残るわけですね。私はねえ、葛原勾当は大変文学的才

能があり、和歌が非常にうまかった、よく詠んでいたの、自分で書いて、発表したり、人に送ったりしたかったのではないかと思うんですよ。ですから日記の中には、歌がたくさん出てますね。

それから、この木活字ですが、日本では江戸時代には、かなり使われていたようですので、葛原勾当が京都に出掛けたりした時に、その話を聞いて作らせたか、既製品を買ってきたのか、いずれにしても、しっかりした専門の職人が作ったものと思われまふ。しかし葛原勾当が考案した、いろいろな数の溝は、後で別の人が刻み込んだようで、その技術はあまり上手とは言えませんが、いづれにしても、この天保八年正月一日から亡くなる前の年、明治十四年一月まで、この木活字を使って、日記を書き続けていたわけですから、その根氣と努力には頭が下がる思いがします』

七、日記に記された出来事

○天保八年八月五日

み^{巳下}のげ^刻こく^にいで、や^八いろ^尋へかゑる

○同六日 う^丑しのげ^刻こく^にいて、ね^眠むればあたまを^頭うつ。それ^其

でもね^眠むる。

む^午まのこ^刻く^ににお^尾のみち。とみ^富よしや^吉に。きたる。それ^其より。

にし^西やま。つい^追ぜんの。せ^世わ^話をするなり。

(西山勾当)

○同七日 灰^灰屋^屋泊^泊はいやにとまりける。

○同八日 雨^雨天^天富^富吉^吉屋^屋泊^泊うてん。とみよしやにとまる。

○同九日 雨^雨天^天すみやの。おいそ。ことな^琴くさは^{「七草」}はじめ

る。灰屋泊。
はいやにとまる。

。同十日 ときよしやにとまる。日、いそがしや。

(注③)

葛原勾当は毎日出稽古のため、転々と門人の家を泊り歩いているが、この移動にはかごを用いたようである。八月六日の眠れば頭を打つ、とあるのは、かごの中で眠ってしまつて頭を打ってしまったことだろ
う。かごは、今日でも残っているが、それをみると、芦で編んだすだ
れが窓の所につけられただけで、何の飾りもない質素なものである。

葛原勾当は、このかごを使用人に担がせて、岡山県と広島県の東部
を歩いていたのであろう。飛交う小鳥や、蟬、虫の声などから、三備
地方の四季おりおりの美しい田園風景を、かごの中で敏感に感じ取つて
いたことであらう。現に今日でも、神辺町八尋付近の小道に入ると、
小さな地蔵の立つわきに可憐な野菊が咲き、赤とんぼが舞う美しい自
然が残っている。そんな道を、葛原勾当は門人に手引きをされながら
歩いたことであらう。

葛原勾当は、道をよく知っていた。使用人たちが行先の家を見つけ
だせずにいると、かごの中からでも、「まだ先じゃ……。もう少しじゃ。
そこをまがって……右の方へゆけ。もう一つ先の家じゃ。よしこの家
じゃ」と、まるで目が見えているように指図したと、葛原幽は書き残
している。

天保八年十一月の日記から

。十三日 たつのげ下刻にふね船のり。まつな松永かたかす高須やにきた
る。むしの虫の音ね琴こと同おさわ。

。十四日 なにをつけたがよ宣からうか。

。十五日 いふが三味線を。さみせん同おさわ。

。十六日 さら復習る。よる夜ゆ雪が降る。よくおもいみれば日数かづが
はや早なにほ何も程ない。あすは明日なんでもよ何そえくぞ。どこで
も不そくをい謂るるには。わし私もへ閉くをそ其こでもい謂われ此
こ処でもい其われ。それにつ其き。わが我師師のい謂わく。けい稽こ古にんをば
わがことおも思えとい謂あり。

。同十七日 み已の刻にいで、ひつじ未の刻にお尾むら部くわだ桑田に
きたる。ど何こ処い行ても。その子其のい忙そがしきと時きほど。わる
いもの無わ何ない。なにを何するにも。ふじ何いうな此やら。きか氣ねる
やら。こ此のよ様ふ悪な。わるいこと事ならな何せこ此ゑきたかと思も
わるる。

。同十八日 たつ辰の下げ刻にいで、ふく福だ田むら村ひらはた広島けにきた
る。う浮き寝ねこと同鉄輪おうら。さみせん。ずい和きのあ物ゑもの。さき
ぎの浸したし物もの。

。同十九日 こま鉄輪きかなわ。さみせん。ずい和きのあ物ゑもの。さき
ぎの浸したし物もの。

。同二十日 こうら。き碇ぬた。こと。そ其こ此で。このた旅ひわ。なん
でもは早やく往いにたく候。また。きにか又るることありし謂がいう
てむ胸ねがす濟みましたわい。

。同二十一日 き碇ぬたに。こんぐ三る段ま末やま歌やと。い謂うこと事があり。
ひとつ。き碇ぬたにわ。さん三だ段ん末じし歌をつけてひ弾なり。さす
れば。かの。さん三だ段ん末じし歌のす不ゑにうたが思あればい良のに。
いま今す少こ勝し手か勝つてが悪わるい何なんとし何よう。さて。ふ不し思ぎ議なこ
とあり。ど何こ処い行てもまた又ゆめが。あい夢ました見とけ善い稽こ古にん
のい謂わるる。わた私しも善き方のこ事をゆ夢め見にみたら善よからう
と。おも思います。

。同二十二日 こ今宵よ何ひ故わな様せ事この事よ何に。ね寝られ事ぬ事こと事かな。わ
けもないこと事ばかりおも思いて。はや早う丑しの刻こ刻く刻になるらん。
こ今宵よ少す少し眠ね悪む悪つたが悪わるい悪か。

○同二十三 日 おうら。えちごじし。（脱字は虫食のあと文字不明「玉川」

同。すゑのちきりこれも同

○同二十四 日 よそゑゆかんとおもふゆゑ。はやくおきて。これ

をしるしたり

たつの。げくくにいでゝとでむらへより同くわだへひつじの

ちうこくにかゑる

○同二十五 日 こしげ。さみせんさらゑ。なにやらかやらでくら

した

○同二十六 日 こまさ。しきのはな。さみせん。これわ。ごりよ

うむら。よねみちのこなり。

○同二十七 日 づんぎりのたはこがみてた。

○同二十八 日 あそんだ

○同二十九 日 たつのげくくにいてゝもくだにいぬるにきたる。

同よる。いではら九一ろうどのに。はじめてたいめんす。

○十二月一日 おきな。やまとふみ。さらゑこと。ほんにせん月

二十七日のよる。あめがふつた。

○同二 日 同おきな。たきつくしこと。同よる。ねむたやねむた

や。

○同三 日 のばん。かんへいどのにあい。ゑんだんの。ぞうすい

はなしをいたし候

○同四 日 あめふり。

あすはいなんといゑば。とめんとする。なんとしたがよかう

ふぞ。

そこゑ。なかつやのやくにんきたりぬ。それゆゑ。けいこを

やめて。でけあい。ちんひん。ばひん。ひらのよざん。など

のことにて。わらうこと。また。やまやま候。同よる。これ

をよむ。

よのわさに。けふもひかれて。くらしけり

あすも同。みとはしりにき。

○同五 日 とりいをつんだり。はしごをつんだり。いけたをつん

だり。よつめをつんだり。つめをつんだり。てがみをかいた

り。はじをかいたり。あたまをかいたり。これをかいたり。

なにやら。かやら。わけがわからん。（つむは紙にての細工なり）

（注④）

小倉豊文氏によれば、「紙をつむ」折紙を作ることとあるが、遺品の中には数多くの折紙細工が残されている。弟子の稽古を聞きながら折ったものであろう。鶴、さる、えび、かに、獅子舞の姿など、実に上手に折ってある。今日では全旨の折紙作家として加瀬三郎氏の名があるが、おそらく葛原勾当も、加瀬氏と肩を並べるほどの作家だったのかもしれない。この折紙の技術を、いつ、どこで習得したのだろうか。聡明な母から学んだのだと思われるが、興味のあるところである。その母のしつけが、きびしかったのか、葛原勾当は暑さに対しては、常に人一倍敏感で苦しんでいたが、肌ぬぎになったりしたこともなかった。常に角帯をきちんとしめ、あぐらを組むこともせずに正座をしていたと伝えられている。

天保八年七月十一日

たつのこくにやいひろへもどるなりけり。はをいたむ

○十月二 日

はをいたみ候。よるわうてん

○同三 日

はもすこしわ。よろしく候

天保九年正月一日 またれいのはをいたみける。つきにおりたかを

候。」と書いておいて、一日置いた二十二日には「今日より又、煙草をのむ。」としか書いていない。これなどは、愛煙家は苦笑せざるを得ない記事であろう。

また、地震の記事も多いが、特に安政元年十一月四日の地震については、約一か月間にわたって地震のことばかり書き続けている。

十一月四日 朝地震 あさちしんゆり。

五日 晩方 ばんかたより。だいぢしんゆり。同よる。すへんゆり。
潮満干定 しをのみちひ。さだまらず。こよいは。つなみが。うつやと
申にて。みやへあがり。よをあかし。
六日 集揺 同ゆりやまぬゆゑ。こやをかけ。蚊帳釣。此処破
しこにあつまりをそれいり申す。
七日 揺上 同ゆりたつれど。さむきよかせにこまり。いゑかへる
もあり。ふなずまひするもあり。をそろしきじせつとかや。

(注⑨)

と書き続け、二十三日になると、「二十三日、大江、広畑。同夜また地震。ひつこいなあ。」と書き、続いて

二十四日 草揺 かへり。
地震 ぢしんもくたびれたかして。日々はゆらぬなり。
二十五日 朝飯過 あさはんすぎ。かみなりとはさても。めづらしい
事哉 ことかな。しかも。なりかげんが。ちがつてゐるわい。どう
でもこれは。かみなりが。ちしんにゆりをこされて。ねほけ
たのであろう。

(注⑩)

と書き、ついには、十二月十四日になって、

十四日 夜揺 よる同ゆる。よるか日るかに二三どづつゆらぬ日は
なし。おそろしきよのありさまかな。

(注⑪)

と結んでいる。

八、家を設計する

現存する家は前に書いたが、大変立派な家である。道から十五段の石段を登って山門をくぐると、右に土蔵と離れがあり、正面に母屋がある。庭には形良く刈り込まれた常緑樹の外に、梅などの香りの良い花樹が植えられ、四季おりおりの花の香を楽しんでいた葛原勾当の生活がしのばれる。この母屋は、もともと暑さに弱い葛原勾当自身が、夏の暑さをさけるために、きびがらなどで模型を作って、大工に指示をしたと言われている。一見百坪、三百三十平方メートルもあろうと思われる大きな平家である。玄関には格式の高い式台があり、勾当という位の高さを示しているほか、客間、仏間、居間、台所などが並んでいる。しかし中に入ってみると、昼間でも電灯をつけないと暗い部屋ばかりである。これはやはり、目の不自由な葛原勾当には、採光よりも、風通しや涼しさなどを求める方が先だったのだろう。

このように家の設計を自分でするくらいの人であるから、何事にも好奇心と、それを応用し取り入れようとする創造性を持っていたようである。その端的な表れが木活字だが、さらに時計の修理をしたという話も残っている。

遺徳顕彰会の、筒井清道、藤井泰造両氏の証言

『勾当さんは、実に手先の器用な方のようにしてね。今も残っていますが、高さ八十四センチ、幅二十五センチの、鎖分銅式の琉球時計があります。これは、文字盤に十二支が刻まれ、その上に鐘がついていて、時間になるとちんちん鳴ったものと思われるですが、この時計の掃除や修理は、一切、勾当さんがなさったようです。その他、十二律の調子笛でも、かさの柄の古いものなどを使って、吹き穴をあけて自分で作ったりしていました。二十八歳の時には、竹に琴絃を張った竹琴を考えて作っていますね。このことは、天保十一年十一月二日の日記に、「こたび、竹琴を、おもひつきたり」と書いてありますが、その翌年京都に上った時、政田屋という所に製造を依頼しています。これは長さ一メートル十センチ、幅十センチ、厚さ四センチの竹の上に二本の絃を張り、高さ九十センチの木製の台脚を四本つけた立派なものです。

勾当さんは、薄茶を好んで召し上ったようで、旅の道中にも、愛用の茶碗やなつめ、茶笥など、一式を箱に入れて持ち歩いていました。召し上り物といえば、湯豆腐などが大好きで——最もこれは歯がいつも痛んだりしていたのだからかもしれません——夕食の膳には、湯豆腐とお酒が約五勺か一合もあれば充分だったようです。ただ煙草は好きだったようで、何本もの煙管が残されていますが、これも細かな細工のしてあるみごとなもので、灰吹きに打ちつけて煙草の灰を捨てるようなことはしなかったとみえて、傷もつかずに、そのまま残されています』

年譜で調べてみると、この葛原勾当が設計した家は弘化二年（一八四五）、彼が三十四歳の四月二十三日棟上げを行い、翌年の一月十二

日に完成しているが、日記の中には、ただ弘化三年一月十二日の欄に「いえうつり。」の五文字しか書いていない。しかし、その二日後にはこの新宅に弟子たちが集まって、お祝の稽古始めが行われ、それが、二十四日まで続いたようである。

十四日、けいこをはじめかけ。

二十四日、みなみな帰る。さても溜飲に困らされる。

と日記にある。この溜飲とは、胃病のことで、歯痛同様に、胃病で苦しんでいたようである。

また、この家を建てた理由としては、三年前に長女が生れているので、余計に、夏の涼しい家に住みたくなったのかもしれないと想像でき、そして新築された年の九月には、長男、光太郎が生れている。しかし、これら家庭内のことは、およそ日記には触れられていない。葛原勾当の結婚について調べてみると、天保七年（一八三六）彼が二十五歳の時、母方の従姉妹にあたる、庄屋田中彦兵衛の長女アサ、当時十七歳をめとっている。そして、七年目の天保十四年九月四日になつてやっと、長女千歳が生れているが、日記には何も書かれていない。ただ、長男光太郎が生れた弘化三年九月二十七日に、「ねんねがうまれた。」とだけ記している。

さらに嘉永二年、彼が三十八歳の時、二男二郎が生れ、一姫二郎の三人の子持ちとなった。しかし、慶応三年正月七日、二十二歳まで育った長男を失った。これらも一行だけ、事実が日記に記されているだけである。

このように、この日記には、家庭内の出来事やそれに対する彼の考え方、行動などいっさい書かれていない。この点からいっても、この日記の性格をどのように考えたらよいのだろうか……。

九、歌人、葛原勾当

この葛原勾当日記を読んでもと、至る所に短歌が書いてある。前に紹介したように、小倉豊文氏は、この短歌を書くためにこの日記をつけたと言われているが、葛原勾当は折にふれて短歌を詠んでいる。ちなみに自分で日記を書き出した天保八年には、真っ先に正月一日に

たちかゑる。としのはしめは。なにとなく
志すがこころも。あらたまりぬる

(注⑫)

と詠ったのを始め、一月十九日には

立ち出て。いまわくるしき。たびごろも
たもとにかよう。かせのさむけさ

(注⑬)

とすぐに短歌が出てきている。次の年、天保九年には彼は二十七歳となり、すでに結婚しているわけであるが、一月十二日には

ひとをまつ。ひとのこころの。くるしさを
いまわこのみに。おもいこそしれ

(注⑭)

そして十四日には、待ちびとが来なかったのであらう、

○十四日 まちびととおそければ。
きのうけふ。いもやおそしと。まちかねし
こころのほとを。しるひともかな

(注⑮)

と記してあり、翌日の十五日には、ただ、「まち人來たる」とだけ書き残している。その日は、待ちびととどんなドラマがあったのだらうか……。

同天保九年春三月十二日の欄には、

立ち出て。ぬれなんことの。わひしさに
やとりがさぬる。はるさめのころ
かくよみて。あるささへおくる。つきに
あさからぬ。きみかなさけに。ひかれてし
なかくもこゝに。やとりぬるかな
かくよみて。あるひとにつかわしける。

(注⑯)

同年五月になっても、齒痛に苦しみながら次のうたを「ある人」に贈っている。

五月二十五日
なにほとも。へだゝぬきみの。さとなるを
たつねもゑせぬ。みこそつられ
同じく二十六日
かならつと。ちきりしひと。きもやらて
さみたれかかる。やとのさひしき

天保十年五月十五日

かたらんと。おもいしひとに。あわされは
語人
 のこしてかゑる。ことのほそうき
残葉

天保十年七月二十八日

さらてたに。かわかぬあきの。ころもてを
乾秋衣手
 かさねてしほる。けさのわかれに
重絞今朝別

天保十一年十月二十五日

なにことも。さたかならさる。よのなかに
何事定世中
 かわらぬきみの。ころうれしき
変君心嬉

同 十月二十七日

かきならす。ねをたにきかは。このさとに
掻鳴音聞此里
 わかすむことを。きみやしるらん。
我住事知

(注⑩)

等々、彼が自書した四十年間の日記の前半、すなわち彼の青年期には、微妙な男女の心の綾を詠い込んだ短歌が、次々と書き記されている。彼は短歌を書いて人に贈る場合にも、日記に記入するのと同じ要領で、定規をつかって、短冊に一字ずつ捺印していったものである。事実彼がそうして贈った短冊も、残っているとされている。

彼には特定の恋人ともいえる想いを寄せる女性がいたのだろうか。残された肖像画を見ても、丸顔で大きな耳をして繊細な雰囲気を持っている好男子である。特に若いころは二、三年ごとに京都に九回も通っており、新しい曲を学んでくると同時に、歌や茶の道などの風流を身につけてきていたから、当時、箏曲を習う商家のお内儀さんや娘さんたちの中には、かなりの想いを寄せる女性も大勢いたであろうと想像される。現在で言うならば、欧米で最新の音楽とファッションを身につけて、帰国したスターのようなものだったのかもしれない。広島

市の箏曲家楠田典史さんが、十五、六歳のころ、葛原勾当に琴を習っていたおばあさんから、こんな話を聞いたことがあります、と語ってくれた話によれば、

『そのおばあさんが若いころ、随分、葛原勾当について琴をならったんだそうですが、その教え方は、非常にきびしかったそうです。何度も何度も、できるまで、きびしく教えたそうです。いったん、琴の前を離れると、もう、それはやさしい人だったということです。話題も、いろいろな楽しい話をしてくれたそうですけれども、根は本当に、几帳面で真面目な方だったそうです』

先師の足跡の著者、箏曲家中塩幸祐氏は、またこんな見方もしている。

『当時はみな門人の家に葛原勾当が、二日、三日と泊り込んで教える出稽古の形がほとんどでしたから、彼は一か月間ぐらいは、点々と門人の家を泊り歩いているわけです。』

その家ではやはり師匠ですし、まして勾当の位を持つ方ですから、それはそれは大事にして、もてなしたことを思いますよ。ですからそれらの家の中には、その商家の旦那たちが認めた、身辺の世話をする特定の女性がいたかもしれませんね』

いずれにしても、葛原勾当は、多感な青年時代を送っていたようである。

十、幕末から明治へ

葛原勾当日記には、幕末から明治へ、あの激動する社会を、岡山と広島

民の一人として記録されている。その意味から言っても、大変興味深いドキュメンタリーと言える。

明治元年正月九日

九日 朝^{あさ}。ながと^{長門}。あき^{安芸}の。ぐんぜいきたりふくやまを^{軍勢}を
せむる。かちう^{家中}一どう。こんざつにて。あわれなるありさま^{混雑}
か^哉な。
なかにも。三のはさまわ。いゑをやかれ。かへるとこなければ^中
ばとて。こ^此にきたまひて日をおくりましけるが。四五日を^送
へて。い^給にたもう。
(がの字別の四の字に重ねて)

(注18)

とあるが、小倉豊文氏の解説によると、慶応三年十月十五日、徳川慶喜の大政奉還のあと、福山藩主の死去などで、政局の推移に対して積極的な態度を取らないでいたため、一月九日長州藩などによって福山城の攻撃が開始された。しかし間もなく和議が成立して戦さは治まっているが、城下の混乱はひどかったようで、そこから二十キロも離れた葛原勾当の家に、福山藩士の三の迫氏が逃げ込んでいることが記録されている。

二月十四日 高屋村^{たかやむら}に於^おて。芸州^{芸州}者^者不埒^{不埒}に付^付
き。うち^{打捨}すてられ候。其^其時^時のうた。
もつ^(の)ふの。たけき^(やたけ)ころわ。さてをきて。
か^斯てなりはつる。みこそかなしき。
(注19)

そして明治四年になると、葛原勾当はもう六十歳になって日記を自分ではあまり書かなくなっていた。二月十日、母の病気に会った時

のことを

二月十日 夜九つ時、終ニ落命ス

と代筆させている。またこの年には、二男の二郎が手に腫れ物でもできたのか大病をして、大阪に二か月程治療に出しているが、そのころの世相については、九月二十一日に次のような記録がある。

九月廿一日 国中万民動揺。大乱暴。村中ニテモ池田柳三宅ヤキ
ハラニ相成、大ニ心配致候事

廿二日 右ニ付、内ノカタツケシテ、仁五郎宅江ノカル

十月 始メカタ、右ニ付、福山ヨリ兵隊クリタシニ相成、司令付
上下六人逗留

と代筆で記入されているが、これは廃藩置県が実施されるため、旧福山藩民が反発し暴挙に出たものであり、さらに、この明治四年には、京都の当道職屋敷が十一月四日に廃止されて、盲人に対しての検校、勾当の階位を始め、あらゆる庇護がなくなってしまった。けれども、そのことは、ようやく十二月の日記に出てくる。

十二月十三日

コノ節、盲人官職被廢候事

とあり、さらに、翌年の、明治五年正月一日に

座頭も、寺も、その他残りなく官位御取上げられ候

と書いてあるが、これなどは当時の中央からの情報が一か月もかかって伝達された様子などがわかる興味深い記録である。

面白いことには、その明治五年六月十三日には、「今日は世界が碎けるげな」とある。これは、地球と星とが衝突するというような予言をした者がいたのだろう。

そして十二月二日の日記に、

ことしげき浮世の業をさし置きて

心ならざる年の暮かな

この三日を正月一日と心得、何事も例年の如くに致せよとの御触れ出しによって詠める。

とあるのは、この十二月三日から、新しい太陽暦を採用し、この日を明治六年の元旦としたことで、当時の日本が近代化の方向に、急速に動き出しているのがわかる。

十一、孤愁の盲楽人

天保八年十一月二十二日の日記の中に、

今宵は、なぜこのように、寝られぬことかな、わけもないことばかり想いて、はや、丑の刻にもなるらん

と自分で木活字を使って書いているところを見ると、葛原勾当は、昼でも夜中でも、気がつくところの日記帳と、箱に入れられた印字用具一式を取り出して、ポツポツと活字を拾って文章を書いていたのであ

ろう。

それにしても、天保年間の日記には前にも記したように、恋歌と思われる短歌が随所に出てくる。この時代は葛原勾当二十歳から三十歳にかけてであるから、最も、心が揺れ動いた時かもしれない。

やがて葛原勾当が五十歳になった万延二年すなわち文久元年（一八六一）の日記を見てみよう。

万延二年正月十五日 ^(う)ごにぶん。

二十日 かへり

二月 ^(五の字消) ●三日 川辺
かはへ

四日 よねぐら 米倉

十二日 かうもと 河本

二十日 をかやま 岡山

三月三日 比企 行
ひきへゆく

四日 とる 比企 隠

●十一日 ひきいんたく ^(十の字消)

三 ●五日 同ひ ●き（日附は三を消さんとして誤り十を消したるか）
比企

十六日 同ひき。 比企

二十五日 とりどのへ 戸守 殿

四月四日 ふねにのり 舟 乗

五日 しりみへゆく 同おまさこと。 ^(曙) 松屋 三味線

あけほのまつやおはる。さみせん。やまと ●ばし。 ^(橋)

十五日 をかやま。 岡山 倉

十八日 よねぐら。 米倉

二十二日 あまき。磯屋。 ^(天城) いそや。

五月二日 うらみへゆく。占見行

六日 かめやまむら。さかやへゆく。おりうあけぼのこと。「曙」琴

十三日 うらみ。占見

十七日 やひろ。八尋

二十四日 ふくやまゆき。いわたやおたか。こと。さいぎや。「西」行

うさくら。桜

八月十日 ふくやま。福山

二十四日 かへる。帰

二十九日 かはべ。川辺

九月二日 をかやま。おてつ。まつのことぶき。「松の寿」

十月日 ひらのおきん。にうもん。平野 尻見 神坂 入門

十日 しりみ。かみさかゆき。おまさ七こまち。夜舟乗

二十日 よ。ふねにのり。

二十一日 あさ。ゑどやゆき。うじめぐり。さみせん。「宇治廻り」三味線

二十六日 をかやま。岡山

十一月二日 よねくら。米倉

十日 ふねにのり。舟乗

十一日 たましま。ゆのきへゆく。うじめぐりのことを。●大島 柚木行

二十一日 おふしま。大島 帰宅

二十三日 きたく。福山

二十六日 ふくやま。

十二月五日 はこだ。箱田

十五日 かへり。帰

十九日 ふくやまゆき。しうぎ。福山行 祝儀

二十日 ほふじ。法事

二十一日 かへり。帰

とし。五十さい。年 歳

(注20)

といったあんばいに、五日飛ばしたり十日飛ばしたりして、しかもメモ程度のことしか記入していない。こんな書き方が文久三年まで続いているが、ついに元治元年からは、自分で日記をつけるのをやめて、弟子たちに代筆させている。その内容は、最も簡単に出版古先と曲名が記されているだけである。そしてその代筆日記は、慶応三年の暮まで四年間続けられている。この間に長女千歳が再婚したり、長男光太郎が二十二歳の若さで死去するなど、家庭の中にもいろいろな出来事が続いていたが、それらのことも、代筆者が軽く一行の記載ですべてをすませている。

慶応四年九月八日、改元されて明治元年を迎えるが、この年の正月から葛原勾当は再び、自分で日記をつけ始めている。もうこの時は五十七歳になっていた。

明治元年正月一日

にわとりも。こゑをかさねて。あらたまの鶏 声 重 新玉

としのはしめに。たちかえりなく歳 始 立 帰 鳴

二日 うぐいすは。まてときなかず。なにをかわ鶯 待 来 鳴 何

たちゆくはるの。しるしとやせん。立 逝 春 印

四日

はるふかく。ひろのゝかすみ。たちぬれば春 深 広 野 霞 立

みちゆくひとの。こへはかりして。道 行 人 声

九日 ^朝あさ。 ^{長門}ながと。 ^{安芸}あきの。 ^{軍勢}ぐんぜいきたりふくやまを ^{福山}ふくやまを ^{有様}ありさま ^{かちう}かちう ^同どう。 ^{こんざつ}こんざつにて。 ^{あわれ}あわれなるありさま ^{かな}かな。

なかにも。三のはざまわ。 ^家いゑをやかれ。 ^焼かへるとこなけれ ^{ばとて}ばとて。 ^{此処}こゝにきたまひて日をおくりしけるが。 ^送四五日をへ ^てて。 ^いいにたもう。

二月十四日 ^{高屋村}たかやむらに ^於をひて。 ^{芸州}げいしゅうのもの。 ^{不埒}ふち ^付つき。 ^{うちす}うちすてられ候。 ^其そのときのうた。 ^{もつ}もつふの。 ^{たけき}たけきこゝろわ。 ^{さて}さてをきて。 ^{かて}かてなりはつる。 ^みみこそかなしき。

十六日 ^{三のは}三のは ^{さまの}さまの。 ^{いんきよ}いんきよ。 ^{きたまう}きたまう。

十八日 ^{かへりぬ}かへりぬ。

二十五日 ^{ためかねゆき}ためかねゆき。

三月二日 ^{かへる}かへる
十一日 ^{たごう}たごう ^{へゆく}へゆく
^{いんきよ}いんきよにて。 ^{けいこ}けいこをせる。 ^生はいだおちせ。 ^{こと}ことにて。 ^わわ
^{かな}かな

ある日。 ^{ひと}ひと ^{にかわりて}にかわりて。 ^{よめる}よめる。 ^{さくら}さくら ^{のうた}のうた
^{しは}しは ^{のとを}のとを。 ^{あく}あく ^{れはくるし}れはくるし。 ^{さくら}さくら ^{はな}はな。
^{さむ}さむ ^{からすして}からすして。 ^{みる}みる ^{よし}よし ^{もかな}もかな。

あるとき ^{よめる}よめる
^{きく}きく ^{なれし}なれし。 ^{やとの}やとの ^{うく}うく ^{ひす}ひす。 ^{こゝろ}こゝろ ^{あらは}あらは。
^{たつ}たつ ^{ねて}ねて ^{こゝに}こゝに。 ^{きな}きな ^{かさ}かさ ^らら ^なな。

ひと ^{にかはりて}にかはりて ^{よむ}よむ。
^{くすり}くすりにて。 ^{みの}みの ^{いたつきを}いたつきを。 ^{のかれんと}のかれんと。
^{のめ}のめ ^{とも}とも。 ^{かは}かは ^らら ^{さり}さり ^{けり}けり。

うめ ^{になつて}になつて。 ^きき ^なな ^かか ^ささ ^るる ^{らん}らん。 ^ここ ^{とし}とし ^{より}より。
^{うゑ}うゑ ^{ても}ても ^きき ^{かん}かん。 ^うう ^くく ^ひひ ^すす ^のの ^ここ ^へへ (注②)

自分で記述を始めると、幕末から明治へと社会が混乱する様子を記録しながらも、おりにふれて短歌を書き込んでいる。そして、相変らず出稽古に何日も歩き回っていたが、やはり年齢なのだろうが、歯も抜けた、と三月二十四日の記述の中に書き残し、その年の暮二十九日には、

一とせと ^{いゑ}いゑ ^はは ^なな ^かか ^{きに}きに ^にに ^{たれ}たれ ^{とも}とも

さな ^{から}から ^{をし}をし ^きき ^{とし}とし ^のの ^{くれ}くれ ^{かな}かな (注②)

と結んでいる。

明治二年、五十八歳になると、自分で記述はしているが、その内容はますます単純化されてくる。最初のころ、あんなに書き込んでいた天候のこと、歯痛、胃痛など全然記載がなくなっている。それどころか、一か月の間に三日くらいしか記入していない。こうして七月から再び代筆が始まり、明治三年、明治四年と二か年半の間続く。

明治五年になると、葛原勾当は六十一歳。この正月から再び自分で日記をつけ始めた。

正月一日 ^{わが}わが ^{六十一}六十一 ^{のが}のが ^{よめる}よめる。
^{うち}うち ^よよ ^{せし}せし。 ^おお ^ひひ ^のの ^{しら}しら ^なな ^みみ ^のの ^ここ ^しし ^をを ^きき ^つつ。
^はは ^るる ^はは ^むむ ^かか ^しし ^にに ^たた ^ちち ^かか ^へへ ^りり

座頭寺。其他の残りなく。官位取りあげざともてらも。そのほかの残りなく。かんゐ御とりあげられ候

(注23)

と、世の中が激しく変る様を一行で書き残し、以後、明治十四年まで、飛び飛びではあるが、外出や、稽古、会合の模様などを自分で記載している。その中で、明治十二年四月二十九日、永年つれそった妻アサに死別した日のことを、

「こん日より。後家ごけになりたる。世有様

とだけ書き残している。

このように葛原勾当は、自力で木活字を使って書き続けていた日記に、とうとう自分で書く最後の日が来た。

明治十四年正月一日

あかつきの鐘響かねのひき。誘われて。身七路。としはきにけり。芽出度。云言葉。はたされて。めてたし。いうことは。心を。をひもこころを。なくさむるかな。

またあるひ。坂谷先生。みまかりたまうとききて。さかたにせんせい。又咲頃有。ちるはなは。またさくころのあるものを。春待甲斐。はるまつかひの。なきそかなしき。

同

をひらくのともを思ひし。かひもなく。かへらぬたひに。ゆくひとのうさ。

(注24)

この歌を自分で記入したのを最後に、それ以後はついに自分で木活字を手に触れることができなくなってしまった。天保八年（一八三七）、二十六歳の時から、木活字で捺印して文章を綴るという非常に根気のいる方法で、明治十四年（一八八一）までの四十四年間書き続けた日記には、その後木活字の文字は見当らない。

そして代筆者によって、稽古や、外出先の記録がメモしてあるが、随所に、「病氣に付外出なし」、「不快在宿」とかの記述がしてある。

明治十四年三月七日から五日間にわたって、葛原勾当の古稀の祝宴が催されているから、このころまでは勾当も元氣だったのであろう。

しかし五月ごろからひきこもりがちとなり、ついに翌年明治十五年（一八八二）、七十一歳の九月八日、病没した。

葛原勾当はその生涯に「花形見」、「蕾の梅」、「おぼろ月」、「孤の嫁入」など数多くの作曲も残し、今日でも演奏されている。

清廉院一泉性善居士

墓は、現存する住宅から東に三百メートルほど行った小高い丘の中腹の葛原家の墓地にある。今日では、その墓石にもすっかり苔が生え、刻まれた文字すら読めないほどになっている。

小倉豊文氏は葛原勾当のこの生涯を、「孤愁の音楽人」というタイトルをつけた。

群書類従を編纂した塙保己一と同じように、盲目の身で文字と取り組んできたこの大きな業績を、我々はいっ乗り越えられるだろうか。まったく自分では読みかえずことのできない日記を書き続けた葛原勾

当の真意はなんであつたのか。やはり大きな謎としか言いようがない。
もし今日のように点字があつたら、彼は一体何を書き綴つたであらう
か……。

本文注

本文11～12頁注①

天保八年正月一日 同、詠める

立ち返る年の始めは何となく

賤が心もあらたまりぬる

「山姥」琴にて五遍

同二日。「越後獅子」琴にて十二遍。大江村、ちよみ、八ツ時に来たる。

「吾妻獅子」三味線と合わせたること。その数を知らず。

思うどち調べて遊ぶ糸竹の

数にひかれて今日も暮しつ

「越後獅子」同五遍

同三日。「里の暁」同二十遍、合わせる。

同四日。ちよみ、辰の刻に帰りぬ。同巳の刻に、大江村。恵三郎来たる。

八ツに帰りぬ。

同五日。伊太郎、ちよみ八ツに来たって、程なく帰りぬ。

同六日。午の刻に、ちよみ来たる。

同七日。「四季の眺」二十四遍合わす。

同八日。巳の刻に鶴の一来たって、程なく帰りぬ。ちよみ、申の刻に帰り

ぬ。後は寂しくなりにけり。

同九日。未の刻に出でて、川北村、尾道屋に来たる。

同十日より、おてう三味線で「夕空」。

川南村、尾道屋こわき、三味線で「鉄輪」。同村内、繁野おりう、三味

線で「屋島」途中より。

同十二日。稽古、こわさ・おてう。

同十三日。稽古、同。また申の下刻に山南村、西光のおとく来たる。おて

う、三味線で「鉄輪」を始め。

本文12頁注②

天保八年六月十六日。休息。やれ退屈や。あつや、閉口閉口

十七日。ある歌に

朝ねしがまた昼ねして晩ねして

たまたま起きて居ねむりをする。

とやら。昨日からねる程にねる程、夢ばかり見るわい。申の刻に出でて、

戌の刻に八尋へ戻る。

十八日。何をしたら訳がわからない。

十九日。なんにもすることがない。あつやあつや。

二十日。また休息。この頃は休息だらけでござる。

二十一日。卯の下刻に出でて、高屋、川本に来たる。おてる。三味線にて

「葵の上」を始める。

二十二日。蝉の声がやかましい。

二十三日。長崎目付の御通り、下に居れ。

本文14～15頁注③

天保八年八月五日。巳の下刻に出でて、八尋へ帰る。

六日。丑の下刻に出でて、眠れば頭を打つ。それでも眠る。午の刻に尾道、

富吉屋に来たる。それより西山追善の世話を致するなり。

七日。灰屋に泊りける。

八日。雨天。富吉屋に泊る。

九日。雨天。隅屋のおいそ、琴で「七草」を始める。灰屋に泊る。

十日。富吉屋に泊る。日々忙しや。

本文15～16頁注④

天保八年十一月十三日。辰の下刻に舟に乗り、松永、高須屋に来たる。「虫

の音」琴同、おさわ。

十四日。何をつけたらよかろうか

十五日。「夕顔」三味線、同おさわ

十六日。さらえ。夜、雪が降る。よく思いみれば、日数がはや何ほどもない。明日は何でもよそへ行くぞ。どこでも不足を言われるにはわしも閉口。そこでも言われ、ここでも言われ。それにつき、我が師の曰く、「稽古人をば我子と思え」といえり。

十七日。巳の刻に出でて、未の刻に尾部村桑田に来たる。何処へ行ても、その子の忙しき時ほど悪いものはない。何をするにも不自由なやら、気兼ねなやらこのような悪い事なら、何故ここへ来たかと思わるる。
十八日。辰の下刻に出でて、福田村、平畑に来たる。「浮寝」「琴」同おうら。

十九日。こまき「鉄輪」三味線。ずいきのあえもの、ささぎのひたしもの。二十日。おうら「砧」琴、そこでこの度は何でも早くにたく候。また、気にかかる事のありしが、言うて胸がすみましたわい。

二十一日。「砧」に「てんぐるまや、てんぐるまや」ということがあり、一つ「砧」には「三段獅子」をつけて弾くなり。さすれば、かの「三段獅子」の末に、歌があればよいのに、今少し勝手が悪い。何としよう。さて不思議なことあり。どこへ行ても、「また夢が合いました」と稽古人の言わるる。わしも先のことを夢に見たらよからうと思ひます。

二十二日。今宵は何故この様に寝られぬことかな。訳もないことばかり思ひて。はや丑の刻にもなるらん。今宵少し眠ったが悪いか。

二十三日。おうら、えちごじし、じ「玉川」同。「末の契」これも同。

二十四日。他所へ行かんと思ふ故、早く起きてこれを記したり。辰の下刻に出でて、戸手村へ寄り、同桑田へ未の中刻に帰る。

二十五日。こしげ、三味線さらえ。何やら彼やらで暮した。

二十六日。こまき「四季の花」三味線。これは御領村、米光の子なり。

二十七日。づんぎりの、たばこがみてた。

二十八日。遊んだ

二十九日。辰の下刻に出でて、百谷、乾に来たる。同夜、出原九一郎殿に初めて対面す。

十二月一日。「翁」・「大和文」さらえ。琴。ほんに先月二十七日の夜、雨がふった。

二日。同「翁」・「滝尽し」琴。同夜、眠たや眠たや。三日の晩。かんへい殿に会い。縁談の雑炊話を致し候。

四日。雨降り。明日は行なうと言え止めんとする。何としたがよからうぞ。そこへ、中津屋の役人來たりぬ。それ故、稽古を止めて、でけあい、ちんひん、ばひん、ひらのよさん等のことにて、笑うこと、また山々候。同夜これを詠む。

世の業に今日もひかれて暮しけり

明日もおなじき身とは知りなき

五日。鳥居をつんだり、梯子をつんだり、井桁をつんだり、四ツ目をつんだり、爪をつんだり、手紙を書いたり、恥をかいしたり、頭をかいしたり、これを書いたり、何やら彼やら、訳がわからん。

本文16く17頁注⑤

天保八年七月十一日

辰の刻に八尋へ戻るなりけり。齒を痛む。

同年十月二日

齒を痛み候。夜は雨天。

同 三日

齒も少しはよろしく候。

天保九年正月一日

又、例の齒を痛みける。次に折鷹を煎じて、父母に上げ奉る。次に少しうたたねをしたれば、齒の痛みも去る。

本文17頁注⑥

天保九年 五月八日

続いて雨も降る。また齒も痛む。

何程の罪や報いのあらわれて

かくまで我は齒を痛むらん

同 九日

雨も降らんに齒を痛む。何の因果にこの様な、きずおい男が、まま、わしゃいとし

同 十日

齒を痛む故、下剤を飲む。されど利かず。さて

同 十一日

薬もよく巡りけるか、齒は直り、腹を痛む。昨日までは舌切雀、今日は人間らしき物を食べた。次に、同よしを琴にて「邯鄲」を稽古

本文17頁注⑦

天保十一年九月二十九日

風吹くわい。一つおたずね申上候。齒の痛み。今日はいかに遊ばされ候や、承りたく候かし。同御返事。齒の痛み、今日はねずみの声にて御座有候。

本文17頁注⑧

天保十一年三月二十二日(略)

寅の刻より降り出し、鳴神も鳴るなり。同昼から天気よくなる。

本文18頁注⑨

安政元年十一月四日

朝、地震ゆり。

同 五日。

晩方より大地震ゆり。同夜数遍ゆり、潮の満干定まらず、今宵は津波が打つやと申すにて、宮へ上がり、夜を明かし。

同 六日

同ゆり止まぬ故、小屋をかけ、蚊帳をつり、ここかしこに集まり、恐れ入り申し候。

同 七日

同ゆりたつれど、寒き夜風に困り、家かえるもあり、舟住居するもあり、恐ろしき時節とかや。

本文18頁注⑩

安政元年十一月二十四日

帰り。地震もくたびれたかして、日々はゆらぬなり。

同 二十五日

朝飯すぎ、雷とはさても珍しいことかな。しかも鳴り加減が違っているわい。どうしてもこれは、雷が地震にゆり起されて、寝呆けたのであらう。

本文18頁注⑪

安政元年十二月十四日

夜、同ゆる。夜か昼かに二三度ずつゆらぬ日はなし。恐ろしき世の有様かな。

本文20頁注⑫

天保八年正月一日

立ち返る年の始めは何となく

賤が心もあらたまりぬる

本文20頁注⑬

天保八年一月十九日

立ち出でて今はくるしき旅衣

袂に通う風の寒けさ

本文20頁注⑭

天保九年一月十二日

人を待つ人の心の苦しさを

今はこの身に思いこそ知れ

本文20頁注⑮

天保九年一月十四日

待ちびとおそければ

きのう今日今や遅しと待ちかねし

心のほどを知る人もがな

本文20頁注⑯

天保九年三月十二日

立ち出でて濡れなん事の佗しさに

宿り重ぬる春雨の頃

かく詠みて、あるさきへ送る次に

浅からぬ君が情に引かれてし

長くもここに宿りぬるかな

かく詠みて、ある人に遣わしける。

本文20頁注⑰

天保九年五月二十五日

何ほども隔たぬ君の里なるを

尋ねも得せぬ身こそ辛けれ

同じく二十六日

必ずと契りし人は来もやらで

五月雨かゝる宿の淋しさ

天保十年五月十五日

語らんと思ひし人に会わざれば

残して帰る言の葉ぞ憂き

天保十年七月二十八日

更でだに乾かぬ秋の衣手を

重ねてしぼる今朝の別れに

天保十一年十月二十五日

何事も定かならざる世の中に

変らぬ君の心うれしき

同 十月二十七日

かき鳴らす音をだに聞かば此の里に

我が住むことを君や知るらん

本文22頁注⑱

明治元年正月九日

九日。朝、長門と安芸の軍勢来たり、福山を攻むる。家中一同、混雑にて哀れなる有様かな。中にも三の迫は家を焼かれ、帰るところなければとて、ここに来給いて、日を送りましけるが、四五日を経ているに給う。

本文22頁注⑲

同 二月十四日

二月十四日。高屋村に於て、芸州の者、不埒に付、打捨てられ候。その時の歌に、

もののふのたけき心はさておきて

かくなり果つる身こそ悲しき

本文23頁注⑳

万延二年正月十五日。ごに分。

二十日。帰り。

二月三日。川辺。

四日。米倉。

十二日。河本。

二十日。岡山。

三月三日。比企へ行く。

四日。土居。

十一日。比企隱宅。

*三五日。同、比企。

十六日。同、比企。

二十五日。戸守殿へ。

四月四日。舟に乗り。

五日。尻海へ行く。同おまさ、琴「曙」。松屋おはる、三味線「大和橋」。

十五日。岡山。

十八日。米倉。

二十二日。天城、磯屋。

五月二日。占見へ行く。

六日。龜山村、酒屋へ行く。おりう、「曙」琴。

十三日。占見。

十七日。八尋。

二十四日。福山行き。岩田屋おたか、琴「西行桜」。

八月十日。福山。

二十四日。帰る。

二十九日。川辺。

九月二日。岡山。おてつ、「松の寿」

十月日。平野おきん、入門。

十日。尻海、神坂行き。おまさ、「七小町」。

二十日。夜、舟に乗り。

二十一日。朝、江戸屋行き。「宇治廻」三味線。

二十六日。岡山。

十一月二日。米倉。

十日。舟に乗り。

十一日。玉島。柚の木へ行く。「宇治廻」の琴を。

二十一日。大島。

二十三日。帰宅。

二十六日。福山。

十二月五日。箱田。

十五日。帰り。

十九日。福山行き。祝儀。

二十日。法事。

二十日。帰り。

歳五十歳。

本文24〜25頁注②

明治元年正月一日。

にわとりも声を重ねて新玉の

年のはじめに立ちかえり鳴く

二日。

うぐいすは待てど来鳴かず何をかは

立ち行く春のしるしとやせん

四日。

春ふかく広野の霞立ちぬれば

道行く人の声ばかりして

九日。朝、長門と安芸の軍勢来たり、福山を攻むる。家中一同、混雑にて

哀れなる有様かな。中にも三の迫は家を焼かれ、帰るところなければとて、

ここに來給いて、日を送りましけるが、四五日を経ているに給う。

二月十四日。高屋村に於て、芸州の者、不埒に付、打捨られ候。その時

の歌に、

もののふのたけき心はさておきて

かくなり果つる身こそ悲しき

十六日。三の迫の隠居來給う。

十八日。帰りぬ。

二十五日。為金行き。

三月二日。帰る。

十一日。田郷へ行く。隠居にて稽古をする。^{〔世〕}

灰田、おちせ、琴にて「若菜」。

ある日、人に代りて詠める桜の歌。

柴の戸を開くれば苦し桜花

寒からずして見るよしもがな

ある時詠める。

聞き馴れし宿の鶯心あらば

訪ねてここに来なかざらなん

人に代りて詠む。

葉にて身のいたつきを通れんと

飲めども飲めども変らざりけり

梅なくて来鳴かざるらん今年より

植えても聴かん鶯の声

本文25頁注²³

一年といえは長きに似たれども

さながら惜しき年の暮かな

本文25、26頁注²³

明治五年正月一日

正月一日。我が六十一の賀を詠める。

うちよせし老の白波残しおきて

春は昔に立ち帰りけり

座頭も、寺も、その他、残りなく官位御取上げられ候。

本文26頁注²⁴

明治十四年正月一日。

暁の鐘の響に誘われて

身に七十路の年は来にけり

目出度しという言葉にほだされて

老も心を慰さむるかな

またある日、坂谷先生みまかり給うと聞きて、

散る花は又咲く頃のあるものを

春待つ甲斐の無きぞ悲しき

同、

老いらくの友と思ひし甲斐もなく

帰らぬ旅に行く人の憂さ

この注は、読者の理解の一助とするために、「葛原勾当日記」小倉豊文校訂（緑地社発行）を引用させていただいた。

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

《著者紹介》

かわの くすみ
川野 楠己

昭和38年、日本放送協会入局、教養部にて番組制作に従事。昭和41年以来今日まで、「盲人の時間」を担当。三療家向けの「医学講座・経営講座」を始め、「先覚者シリーズ」「働く盲人たち」「人と業績」などを企画制作してきている。

他にラジオ・ドキュメンタリー番組も企画制作。——目から手が出る——昭和40年度文化庁芸術祭、文部大臣奨励賞受賞。——窓の中の風景——昭和51年度文化庁芸術祭・文部大臣優秀賞受賞。昭和50年、放送文化基金奨励賞受賞、の他、イタリア賞、日本賞、などの国際コンクールにも作品を出品している。

現在、番組制作局社会教育部・チーフディレクター。

人と業績——盲先覚者の偉業をたずねて——

昭和59年5月15日 発行

定 価 1,200 円（送料別）

著 者 川野 楠己

発行者 本間 一夫

発行所 日本盲人福祉研究会

〒160 東京都新宿区高田馬場1-23-4

日本点字図書館内

電話 03(200)1130

振替口座 東京6-16103

印刷所 合同印刷株式会社

〒130 東京都墨田区業平2-9-13

電話 03(624)6111（代表）

協 賛 社会福祉 法人 新日本友の会

日本盲人福祉研究会 定価二二〇〇円